

# 読賣新聞

## 大津絵 風刺の面白さ

鬼が念仏を唱え、七福神が相撲を取り、ネコとネズミが杯を交わす…  
…江戸初期から東海道の大津宿（現在の大津市）近くで土産品として売られていた大津絵に魅せられ、その世界を著書「大津絵」（角川ソフィア文庫）にまとめた。日本人でさえよく知らない奥深い魅力と歴史を掘り起こし、140点以上のカラー図版と共に紹介する。

「大津絵は味わいがあるだけでなく、庶民の風刺やユーモアが含まれている。日本のマンガの元祖だと思います」と話す。大津市の観光大使にも任命されたばかりだ。

フランス生まれ。仏国立東洋言語文化大学教授で、日本近世・近代美術史と出版文化史が専門。「大津絵」は昨年母国で出版した自著の日本語版だ。

日本滞在は足かけ15年近くになる。若い頃から谷崎潤一郎や川端康成の仏語訳作品に親しみ、日本の美術史を学ぶため東京大学に留学していた時に大津絵に引かれた。初期は仏画として、後には護符や子供のおもちゃとして、絵描きが客の目の前で素早く描いた大津絵は、簡略ながら生き生きした筆の勢いがある。当時は江戸の浮世絵と並んで人気を集めたが、安手の土産物として捨て去られ、国内の美術館にも数百点しか残っていないという。

「西洋の近代的な考え方から、絵師が作家性を発揮した浮世絵は芸術として認められますが、名もない絵描きが同じ題材を繰り返し描いた大津絵は美術史の中に位置づけられなかったのでしょう」。大正時代になって、民芸運動の柳宗悦らに再発見され、ミロやピカソにも愛された。

フランス革命以降母国の伝統となっている風刺漫画との共通点も感じている。「例えば鬼が念仏を唱える絵には、お坊さんの格好をしていても心は鬼の

◇  
次回は8月22日の  
予定です。



江戸時代の民衆絵画「大津絵」を  
研究する日仏会館フランス事務所長

クリストフ・マルケ さん 51

Christophe Marquet



大津絵のコレクションを見せながら話すクリストフ・マルケさん

ようだという皮肉が込められている。お上を批判することがご法度だった江戸時代に、人間のおごりや愚かさをユーモラスに描いています」

その風刺精神が今、世界的に自粛ムードになっていることを懸念する。「風刺は共通の理解や認識があってこそできる、いわば成熟した文化の証し。ネットの時代になって、逆に難しくなっていますね」と顔を曇らせた。